
大和と青春

トゥカチンチラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和と青春

【Nコード】

N1217Z

【作者名】

トウカチンチラ

【あらすじ】

エリートサラリーマンで、間もなく結婚を控える大和祐司が、或る日少女と出会い、高校時代へと戻る。

第一章

「大和君。」

課長の小さいが厳かな声が社室一帯に響き渡る。それと同時に社室において生じていた微妙なざわめきが静まった。

「はい、課長。」緊張感の籠もった声が静かになった社室に響く。

「ちよつと来て。」

「はい、課長。」

大和君が課長の座る机へと歩いていく。片や20代後半の若者、片や顔に皺が見る者がある程度知覚できるほどばかりある、50代前半の老体である。

「この前伝えておいた件なんだがね……」

「はい、課長。」

と、二人でやり取りが始まる。社内全体を見渡してみると、皆黙々と仕事を続けている。どうやら二人がこう接触するのは決して稀有の事ではなく、いつものことの様である。

5、10、15分と経つが二人はまだやり取りは続けていく。課長の顔にはどこか微笑みが薄らと浮かんでいる。どうやら課長にとって大和君はお気に入り部下なのであろう。

さて、この場において二人のやり取りの具体的内容をわざわざ記述する必要性はない。問題なのはこの大和君なる男の特徴・経歴についての記述である。大和君は現在28歳、将来性もまだまだ感じられる男である一方、もうすでにある程度年齢を積み重ねた男である。つまり年長者というわけではないが、かといって世間知らずの若者というわけでもない。若者と年長者の丁度中間に位置する年齢に彼はあるわけである。

見たところ、ピシツとしたスーツ姿が様になっており、顔にむだな毛もなく清潔感あふれる姿。端正な顔立ち。現代流行語で草食系と肉食系という言葉（これは恋愛だけに限らず、人生観そのものに

対しても応用が利く言葉であると筆者は考える）があるのだが、彼にはどちらか片方が偏重して当て嵌まるというわけでもなく、両方の要素を持っているような容姿である。

大学は名を聞けばだれもが頷く有名な大学を卒業しており、現在勤務しているこの商社もやはり誰もが頷く会社である。世間でいえば勝ち組のレールにのっている、といえるであろう。

当然ながら艶福豊かな人物であり、今まで清楚でレベルの高い女性とも交際してきた。そして、現在もとある別会社の令嬢とも交際中であり、相手は24歳。そして双方とも結婚適齢期、というわけで、今度結婚することが決定するに至った次第である。結婚する、といえやはり前途に待ち構えている苦難にどこか不安を覚えつつも、やはり嬉しいもの。大和君も当然ながら喜んでいるはずである。そう言われてみれば、今日の大和君は声の調子といい、顔つきとい一段と重みが備わっている。そのことと彼が結婚することは決して偶然ではないはずである。

しかし、うれしさもある一方、今大和君にはとある悩みを心中に抱いていた。いや、おそらく30近くになると、多くの人が密かにも覚える悩みであろう。つまりは、「このままでいいのか？」という悩みである。現在自分はこうして働いている。しかし、今の自分の人生はこのままでいいのか？このままずっと働き続けるのか？他の皆と同じようにサラリーマンをやっているのだが、もっと違った人生があるのではないのか？本当の自分はもっと違うところにある、もっと個性的な人生を送っていてもいいのではないのか？

そしてこういった「自己個性型的」悩み（とても名付けようか）は彼の結婚にまで波及した。つまりもっと個性的な結婚があるのではないのか？あまりにレールに乗り過ぎた結婚、もっと別な結婚があるのではないのか？てな具合である。事実、これは恋愛結婚とはとてもいえない代物である。相手の容姿、地位等を客観的に捉え（恋愛において客観的な判断は無理であるということ位、賢明なる読者ならすでに御存じであることだろう）、将来性を踏まえて結婚に

踏み至った。無論、相手のことは嫌いではないが、かといって格別好きというわけでもない。また、彼の多くの同期も既に結婚していることから、周りに流されて、というのも周囲には隠しているが大きな理由の一つとなる。相手のことを好きになって、大恋愛をしたい、相手に尽くしてしまいそうな程、とある女を好きになりたいというのが大和君の密かな願望であるといってもよい。・・・と、あたかも彼がまるで乙女チックな悩みを持っているように書いたが、人生観云々はともかく、彼の結婚に関する悩みはそれほど重いものでもない。自分でも気づかない内に抱いている悩みであり、この悩みが頭の内に横切ったら、それを玩味する間もなくどこかへ行ってしまう。その程度の悩みでしかない、といえばそれまでである。それに課長にも信頼され仕事も充実している。ともすれば、こういうありきたりながらも、密度の高い人生も捨てたものではない、と思うこともまた、しばしばである。

やや、前置きが長くなってしまったようだ。課長と大和君とのやりとりに戻りたいと思う。

「・・・というわけだから、来週の月曜日までお願いできるかな？」

「わかりました、課長、出来るだけやってみます。」

課長が微笑みを浮かべながら頷く。

「すみません、では失礼します。」

そういつて大和君は席に戻り、再び意気揚々と仕事にとりかかる。またいつもの、ささやかなざわめきが部屋に戻る。

「大和君、ちょっとわからないところがあるんだけど・・・」

課長だけでなく、社内に数名いる女子社員から同僚、上司からまで、いろいろな人から声をかけられては質問される。

「ああ、ここはね・・・こう・・・こうするんだよ。」と相手のパソコンをいじりながら、相手の困った点をどんどん解決していく。

経験を積んだ読者ならもう既におわかりだろうと思うが、仕事の

最大の敵といってもいいのは人間関係である。そして大抵の場合うまくいかないものなのだろうが、大和君についてはどうやら問題ないようである。いや、勿論彼にも仲の悪い人間はいる。しかしながら、彼はそれを気質の違いから生じるものであり、気質の違いは生まれつきのもの。誰だって仲の悪い人なぞつくりたくないだろう、という考えを大和君は抱いており、だから、相手のことを嫌うにしても、どこか寛容ある、同情心溢れる状態で相手のことを嫌っている。

時間は移り、五時半、会社の定時である。無論大和君に残業というものはない。皆もそれをしっかりと理解している。

「では〇〇さん（上司の名前）これで」

「はい、お疲れさん」

会社から離れつつ携帯を取り出してみると、何やら着信メールが。開けてみると

「今夜会えない？ 奈美子」奈美子とは婚約者の名前である。

「んー今晚か。どうしようかな。なんかめんどいな……」

いや、でも結婚することになるんだし……。どうしたものかな。などと悩みながら会社を出て道路を歩いていた。駅に向かって歩いていく。

大和君が見上げると、空は薄暗く灰色になっていた。6時近くのため暗いのは当たり前だが、透き通るような暗さではない。これから一振りきそおうな雨である。

「ああ、そうか。そういえば朝の天気予報で今日雨降るかも、って言ってたっけ。傘忘れてきたな。まあ、降ってきたらコンビニかどこかで傘を買えばいいか」そう計らいながら足を運び、駅へと向かっていった。

第二章（前書き）

会社の帰り道、大和はある少女と出会う。どうもその少女は大和の事を知っているようだが

第二章

「お兄さん！」

大和君が駅へと向かって歩いている途中、後ろから彼を呼び止める声が聞こえた。声はトーンがかなり高く女性の声である。10代後半、いや10代前半の声とも捉えられる声でもある。

だが、大和君はまさか自分のことを呼び止めていることなぞつゆにも気付かず（彼に20歳以下の若い女性の知り合いはいなかった）、そのまま足を運ばせていった。

「お兄さん、お兄さん。」声がさつきよりも若干大きくなる。それ故、ひよつとすると自分の事を指しているのではないだろうか？大和君は訝り、後ろを振り向く。見ると微笑んだ10代後半の女子高生のセーラー服の上にブラウスをきた女子高生らしき女性が立っている。しかも微笑みながら。だが、大和君は彼女のことなぞとんと知らぬ。ひよつとしてからかっているのだろうか？そういう考えが頭に横切った大和君は、再び踵をまわし背を少女の方に向け歩みを再開した。すると

「お兄さん！お兄さん！お兄さん！」とまたもや女子高生らしき女性少女は声をかける。今度はかなり大きい。周囲の通行人にもどこかどよめきが生じる。大和君はかなり苛立った。だが決してまたもや相手に顔を向けるようなことはせず、ちらつと後ろを振り返って、相手の顔をほんのわずかしきみなかった。「これは何かの悪戯に違いない。冗談じゃない。子供の御遊戯に付き合っていられるか！」そう考えた大和君は、逃げるように歩を速めた。

「お兄さん！！お兄さん！！お兄さん！！お兄さん！！」ついに女子高生らしき女性はお兄さんと4連呼、大声を張り上げた。今までざわついていた周囲の雰囲気も静かになり、一体何事か、と二人を凝視している。その場を逃げようとしていた大和君もこれにはびつくりし、ついに観念したのか、その場でとどまり体全身を少女の方

に向けた。無論、困惑した顔で。

「一体なんなのかな、お嬢ちゃん。見たところ……女子高生位のようにけど……」と大和君が困惑気味に問う。

「ふふん、まあそんなとこかな。」何故か、女子高生らしき女性は勝ち誇ったような様子をした。

「とにかくこんな通行道のど真ん中で話をしてしょうがない。せつかくだから、場所を変えよう。」

「いいけど、それじゃ一体どこで話そうか？」

「うーん、そうだな……ああ向こうにちよつと歩いたらコンビニがあつたつけ。そのコンビニの隣が空き地だからそこで話そうか。」

「いいよ、じゃあコンビニに行こー！」

それで二人でコンビニまで行つた。

「それで……」と大和君が口を切つたら

「ごめーん、その前におごつてほしいものがあるんだ。」

「な、なんだよ図々しいな。一体何をおごつてほしいんだ。ていうかなんで俺がいちいちお前に奢らなければいけないんだ？」

「うーんとね、莓アイス！」何か嬉しそう。

「莓アイス？まあそれ位なら別にいいけど。なんだってまたそんなもんが欲しいんだ」

「それ食べながらだと、話しやすいし、なんたって私の好物だから！」

「しゃあないな……じゃあ一緒に中に入るか。」

そう言つて二人でコンビニの中に入る。そしてアイスコーナーへ。

「あーこれこれ！私これが欲しいんだ。」

「（たく本当に活発で子供っぽいんだな。しかーしこういう人と会つのもなんか懐かしいな）あーはいはい。それじゃそれね。」

「うん、ありがとうお兄さん。」

「大和祐司。」

「？」

「大和祐司っていうのが、俺の名前だ。」

「うん、知ってるよ」

「（何故知ってる？ついさっき出会ったばかりなのに・・・嘘をついているのか？いや仮に嘘だとしてもつく利点、嘘をつく必然性が見当たらないし・・・くつ、一体何なんだこいつ。）と、とにかくお兄さんというのは照れ臭いから祐司とでも読んでくれ」

「わかったよ！祐司兄ちゃん！！」

「はあ、駄目だこりゃ。」

コンビ二の外へでる。そして隣の空き地へ。

女子高生らしき女性は祐司に奢ってもらったアイスをもぐもぐ食べる。それを凝視していた祐司は改めてこの謎の女子高生を観察している。

青い制服の上に長袖のセーラー服を着ている、というのはさっきも述べた。髪型は黒髪のショートヘア、身長は150センチといったところか？平均的な女子高生よりもやや身長が低い。肌は茶色っぽい。日焼けしているのでは無論なく、地肌なのだろう。といってもそこまで茶色くはなく、白色と見えなくもない。彼女のなんといつての特徴は彼女全身を覆っているその活発さにある。非常に元気で「青春真っ盛り」という言葉がよく似合う。その声量の大きさも含み彼女と会う者は例え重度に落ち込んでいても元気になったとしてもそれは決して言い過ぎではあるまい。（といつ、大和君は元気になっていないが。まあ彼は落ち込んでたわけでもなし、それに元気になる以上に面食らっていたのである）。

「どうだいおいしいかい？」

「うん！！おいしい、おいしい、私これ大好物なんだ！！」

「そうか、そうか、そりゃよかったな。」

「うん！ありがとう！！」

「（ふう、にしても若いな。これが若さのパワーってうやつか？そっぴや俺にもこんな時代があったっけ・・・・・・てことは、俺はもうかなり年を喰ったということか・・・・・・」

「それ食べたら色々俺の質問に答えてもらうからな。」

「え？ふふん！いいよ！いいよ！どんどん聞いてね」

「（ふう。こっちの気も知らずいい気なもんだ。……にしても本当この女はいつたい誰なんだ？俺は全然知らない。だがどこか懐かしい感じもする。それは何か？俺がかつてこの女のように青春真っ盛りな状態にあったからか？それともこの女が俺の知り合いの誰かに似ているからなのか？まさか俺の隠れたファンで、今日愛の告白でもしにきた……って雰囲気ではないな。そんなおめでたい考えはやめた方がこういう場合よさそうだ。いや、しかしならなぜわざわざ俺の名前を知っている？同僚の娘さん？なら話しはまあわかるな。やはりその節が強そうだ。にしても、だとしたら無理な女もいたもんだ。」

「大好きな莓アイスは無事全部食べ終えたか？」ちょっと大和君は苛立ちながら問うた。

「うん！」そんな大和君の苛立ちなぞつゆ知らず、少女は満面の微笑みで答える。

「そうか、そうか。ならば俺の質問に答えてもらうぞ。」

「ふふん。いいよ、いいよ！」

第三章 大和と少女の会話

「まず、どうして俺の名前を知っているのか？」

「知っているから。」

「なんだよ、それ。ちゃんと答えろ。どうして俺の名前を知っているんだ？」

「ふふん、知ってるから知ってるんだよ。」

「だから何で知ってるんだよ。」

「大和祐司。OX商社勤務。結婚間近。」

「な、なぜその事を……」

「ふふん」

「ストーカーかお前は。」

「ふふん、別にそういうわけではないんだけどね。」

「ストーカーだろ。それだけ人の事を知っているなんて。お前は俺の会社の同僚の誰かの娘さんか？なんか噂になっているのか？」

「いや、別に。ってか私に親なんていないし。」

「はあ、ますます意味がわかんねえよ。」

「ふふん。」

「ふふん、じゃねえっての。まったく何を勝ち誇ったかのように振る舞っているのやら。」

「ふっふーん。」

「はあ。勘弁してよ。じゃあ質問の趣旨を変えよう。何故俺に声をかけてきたんだ？」

「うーん、かつこよかったから!!」

「は？」

「かつこよかったから!!お兄さんモテるでしょ？」

「いや、その（満更でもない様子）」

「私も祐司兄ちゃんのことかつこいいと思うよ、だから声かけたの!!」

「お前な、かつこいいといってくるのはありがたいが、かつこいいと思った人間を片っ端からそうやって声をかけていくのか？」

「うん、祐司お兄ちゃんだけだよ。」

「俺だけって、それは一体どういうことだよ。」

「お兄さんだけ。お兄さんは特別なにやら「青春」に憧れを持っているみたいだから。」

「え？」

「だから、青春に「憧れ」を持っていたみたいだから。」

「え、まあ。うんそりゃ、まあ間違っではない・・・のかな（一体なんなんだこいつ）」

「ふふん。だからお兄さんに声をかけたの！」

「ああ！そ、そうか・・・。」

「ふふん。そうそう！！」

「まあ、なんかよくわからんが、とりあえずは俺に近づいたわけがわかったような気がする。ところで」

「うん？」

「君は誰？」

「天使。」

「は？」

「天使のような女の子。」

「意味がわかんねえよ。あんまりふざけていると俺もついてくぞ。」

「へえ、どこへ？」

「どこへって駅へ。」

「駅へいつてどこへ？」

「・・・（そういや、今日奈美子と会うかどうかまだ判断しなかった。勿論メールも返信していなかったっけ）」

「メール返信してないでしょ？」

「！！なぜわかる？（相手の考えが読めるとでもいうのか？いったいこの女は何者なんだ？）」

「ふふん。」

「……………」

「私ね、祐司兄ちゃんの悩み事を治してあげる。」

「……………は？」

「どう天使みたいでしょ。悩み事を治してあげて欲求不満をかなえてあげるんだから、もうまさに天使って感じ？」

「……………悪いが、俺に悩みなぞない。欲求不満もない。」

「ええ〜!!」

「ないったらないんだよ。わかっただろ。」

「ええ〜？」

「ええ〜、じゃないだろ全く。」

「ええ〜、よくもそんな嘘つけるもんだね。」

「なんだと？」

「図星でしょ。」

「う」

「ほら図星の顔をしている。やっぱ図星だ」

「う……………（何かこの女に対して隠し事をしても無駄な気がする。

）」

「図星！図星！！」

「そうそう。図星だよ。図星。俺は現在悩むのさ。もっと違う人生があるんじゃないのかってね。」

「ふふん。はじめからそういえばいいのよ!!」

「はいはい。」

「それでお兄さんもし違う人生を送れることができればどうするの？」

「え、どうするって。」

「こんなかつこいい人生送りたいとか、ナンバーワンになりたいとか、なんか色々あるんじゃない？」

「まあ……………まあ青春みたいな充実した人生を送りたいな。今の結婚相手とも本格的に愛し合っているというわけでもないし……………」

「ふんふん。」

「で、何かい。君は俺にそういう人生を送らせられることができる
とでもいうのかい？」

「ふふん。」

「ふふんつて。」

「ふふん！」

「あーもう。じゃあもう僕の願いを、かなえてください（はーなんかばかばかしいや）」

「うん！わかったよ！！じゃあ、頑張ってきてね！！いち、に、
のさん。それ」

「なんだこいつ、テレビアニメみたいに掛け声をしながら腕を振り
回して……。ってあれなんかあたりが歪んでいく。うわなん
だこの眠気に襲われるような、頭がくらつとするような感覚は……。
。うわ……。。」

第四章 高校時代という青春へ（前書き）

大和は目を覚ますと高校時代の教室にいた。

第四章 高校時代という青春へ

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・う ・ ・ ・ ・ ・うん

ここは ・ ・ ・ ・ ・ どうやら目が覚めた ・ ・ ・ ・ ・

「こら！！大和！！！」と、怒声が辺り一帯に響き渡る。

「は、はい」と大和君は上司や課長に怒られたのだらうと勘違いをし、席から立ち上がり、姿勢を正す。

だが ・ ・ ・ ・ ・ みると、相手は上司でもなければ課長でもない40代あたりのいかつい中年。

「おいこら大和。俺の授業中に寝るとはいいい度胸じゃないか。しかも優等生の筈のお前が。これは一体どういう見た、ええ？」

「え、いやその ・ ・ ・ ・ ・」

大和君は戸惑っていた。それは寝ていたことを怒られたからというよりも、それ以上に体験している超不思議現象の故だからである。と、いうのもまずこの40代位のいかつい男。ほかでもない、大和の高校時代の英語の教師である。別に格別の懇意があつたわけではない。だが、そのいかつさから、相手の容姿を見れば一瞬で思ひ出してしまうのである。

他にも戸惑っている原因はあつた。英語教師の後ろには黒板がある。そもそも今気付いてみれば自分は高校の時の教室にいないではないか。そして周りの生徒が自分を半分嘲笑しながら注視しているではないか？これは一体？これは一体どうしたことなのだ？自分はついさっきまでコンビ二の隣にある空き地とある女子高生と会話していたではないか？それが一体なぜこうして高校の教室へ。更にある、自分の服装を見てみると高校時代の制服を着ているではないか。自分は社会人としての毎日の生活を励み、スーツを日々着てい

た。というかついさつきまではスーツ姿だった。いや、一体本当にこれはどうしたことなのだ？

「（ついさつきまで、俺は社会人でスーツ姿で毎日会社勤務をしていた。そして少女と話をしてコンビ二にいた。それがこうやって高校時代に帰ってきた。夢・・・なのか。いや、夢にしている実感、立体感、現実感がありすぎる。夢とは思えない。やはりあの少女の能力・・・能力？何を馬鹿馬鹿しいことを。アニメやゲームではあるまいし。しかし、あの女は全く出会ったことがないにも関わらず俺の名前をしっていたし、何か俺の心を読んでいるかのような、全てを見透かしたような感じの態度をとっていた。それになんといつても、ただならぬ、こう「青春の香り」を漂わせた雰囲気を持っていた。ならば今こうして俺が高校時代に帰ってきたこともあの少女と何か関係があるのだろう。いやそんな事がしかしそうではないと説明がつかないし・・・うーん。どうしたものか。どう判断をつけたらいいものか・・・よし、仮にこの事態があんな女によって引き起こされた事態であると仮定しよう。何というかあんまり使いたい単語ではないが俺がこうして高校時代に舞い戻っているのもあの女の＜能力＞であつたでしょう。それでまだ半分だ。つまりだ、俺がこうやって高校時代に帰ってきたからといってそれが何を意味するのか、ということだ。何故あの女は俺をわざわざこうやって過去に連れてきたのか。その意図するところは何なのか。・・・わかん。俺がこうやって高校時代をもう一度送って何になるというのだ。俺が欲しかったのは新しい人生、もつと今と違う個性の満ちた人生、決して昔などではない。まったく、あの女は本当にわかつていいのか・・・・ん、そういえば以前俺は自分の人生に青春が欲しいとも考えていたよな。青春。高校時代もまた青春・・・ばかかあの女。ひょっとして俺が高校時代を送りたいとでも勘違いしたのか。だとしたらこの事態は甚だ迷惑なものだ。一体さつきまでの社会人時代に実際に戻れるのかな。いや、まてよ。今からならまた別の人生を

歩ませることができる。ここから10年間ほどの人生を味わってき
たから、その経験を生かしてもう一度違う人生、今度こそ自分の理
想にかなった人生を送ることができる。そういう意味であの女は俺
の願いをかなえようと思ったのではないのかな？なんかしつくりこ
ないが、そうとしか考えられない。ふう、にしても懐かしいなこの
高校時代の感触。あの頃はエネルギーに満ち満ちていたつけ。」な
どなど、大和君は先生の話の聞いている振りをしながら思考を流れ
させていった。

「あ、そうだ当時仲の良かったあいつらもまたこの場にいるのだ
ろうか。」と大和君は授業中であるにも関わらず、あたりを見まわ
し始めた。

「こら、大和！！今度はなんだ、キョロキョロして。どうした、
どこか体の具合でも悪いのか？」と英語の教師がまたもや怒鳴る。

「あ、いえ、先生ちよつと考え事をしていただけです。」としど
ろもどろな状態で大和君が答える。

「考え事をしていただと？お前ほんといい度胸しているな。よし
！！大和祐司、教科書に書いている英文を日本語に訳してみる。」

「教科書？」

机をみると何やら教科書が開いていて、英文がぎつしりと埋まっ
ている。しかし、

「えーと、すみません先生。一体どの文章を訳せばよろしいので
しょうか？」

「はあ、ほんと今日のお前はどうかしているな。はい4行目か
ら6行目までだ。」

「ああ。はいはい。えーと Tom y mind the m
ost interesting thing in art i
s the personality of the art i
s t; and if that is singular, I
am willing to excuse a thousan
d faults. (サマセット・モーム) The Moon a

nd Six Pence”より）ですかね。」

「よろしい、それで和訳は。」

「私見によれば、藝術においてもっとも興味深いものは芸術家の個性である；そしてそれが独創的なものであれば、私はどんな欠点も喜んで許すつもりだ。」クラスから感嘆の息が漏れる。

「よろしい。どうやら何やら奇妙な調子に陥っているようだが、能力は問題ないようだ。それでこの文章なのだが………」
という具合に先生が先ほどの文章の解説を行っていく。

「（ふう、英語を高校卒業後も勉強しておいてよかったな。しかし、こうやって先生にあてられて、生徒が答えるという感触はなんか、社会人時代の上司と部下の関係とあまり変わらないなあ。」

「大和。」

「はい、先生」

「後で俺のところにこい」

「あ、はい先生。」

と、丁度チャイム、つまり授業終了の鐘になる。

「よし、じゃあちよつとこい」

「はい、先生。（そういえばこの先生、担任の先生でもあったっけ………」

廊下にて、先生と生徒が二人。

「大和、進学先は問題ないのか。」

「進学先？」

「とぼけるな。大学だよ大学。試験ももう結構近づいてきているし、大丈夫なんだろうな。なんていったってお前は期待のホープだからな。優等生で。まあさっきの和訳を聞いている限りでは問題ないが。」

大和君はここで首をかしげた。そういえば自分は周りに期待されてエスカレーターを登るような形で一流大学へと登って行った。だが、二度目の人生、もっと違う道があるのではないか。世界放浪、医者、企業の独立、食品店の経営、カフェの開業……大学時

代からでも遅くはないのもあるが、大学へと進学するというエスカレーターを登る自分にどこか戸惑いを感じてしまったのである。

「え、はい、いや、まあ、それは」

「？なんだなんだ。まさか志望校を変更しようというのか？まあそれはお前自身の問題なので、俺はどうこう言わないが。」

「いえ、そういうわけでは・・・。。。」

「とにかく、しばらく考えてみてくれ。また放課後にでも一緒に話そう。」

「はあ、わかりました先生。」

「ずいぶんと元気のない返事だな。わかったな。」そう言い捨てるような形で英語のいかつい先生は去って行った。

第五章 休み時間

三限と四限をつなぐ休み時間。大和君は先生の歩いていく背中を見送って教室の席へと戻る。

「次の授業は何だったっけ？ああ、そういえば現代文だったか。教科書は、と、（と、机の中を見る）あるな。うわ懐かしい、夏目漱石、太宰治、有島武郎、芥川龍之介、文学は大学時代にたくさん読んだんだよね。まさか今の高校時代こつも文学漬になるとは思っていなかったが。」

「おい大和！」後ろから呼び声が。

「うん？」と大和は後ろを振り返る。見ると平均的な男子の身長で、坊主、童顔、肌黒の男が立っていた。見るからにスポーツ系である。

「なんだ……（えと）雄大か。久々じゃないか。元気にしてるか。どうしたんだ。」

「なに？その長年会ってなくて久々に再会したかのような挨拶は？元気にしてるに決まってるだろ？」

「まあ、それもそうだが……。」

「よおー！」とこれまた別の男。こちらは大和ほどではないが身長は高めであり、眼鏡をかけている。髪の毛が少々ボサボサであり、少々家に引きこもりがちな、いわばオタク的な存在である。

「どうしたんだ？さっきの授業は？優秀なお前らしくもなく、慌てふためいて……。」

「なんでもないよ。ちよつと授業中わからないことがあって……。」

「なんだお前でもわからないことがあるのか？」と今度はスポーツマンがいう。

「いや、そりゃあるさ。世の中わからないことだらけさ。」

「ええ」と二人同時に。

「なんだよ……。」

「どうしたんだお前？ 普段からはちよつと威張りがちだったくせに、今日はやけに謙虚でさ。」とオタクはいう。その発言を耳にして大和君は少し心なしに動揺する。

「いや、その。俺もちよつとは大人になったってことだろう。」

「何が大人になっただ！！」とスポーツマンは大和君の背中をバンツと思いつき叩く。

「痛いなやめろよ。」と大和君。

「ところでさ、祐司。最近のあのアーティストの音楽聴いたか？」とスポーツマン。

「あのゲームはクリアした？」とオタク。

このように話題が最近のゲーム、音楽、TV番組、本、流行などに話題に及んだ。そういった話題に心半分で相槌を打ちながら大和君は思う。

「懐かしいな。そういう音楽や本、流行などを昔は追いかけていたな。逆に今はいつの間にやら流行なんて追いかけてなくて、昔の古いやつばかり追いかけるようになったな……。まあ、それはともかくさつき浩二が言ったように俺って普段から少し生意気だったんだな。ふふ、若気の至りみたいで、恥ずかしいというよりも微笑ましいな。しかし、この二人高校時代あれだけ仲が良かったのに大学時代では数回だけ会うようになり、就職してからは音沙汰もなしだ。一体今はどこで何をしているのやら。そういえば流行もいつの間にかやら消えていった。あれから10年経った今はもう完全に影も形もない……。時間の流れというのはつくづく無情なものだな。なんか悲しいや。俺もこのままいつかは老いて死んでいくのかな……。。」

などと物思いにふけていた大和君だが突如授業の鐘がなった。

”キンコーンカーンコーン”

「おおじゃあ昼ごはん一緒に食べような。」とスポーツマン。

「また後でね。」とオタク。

「ああ、また一緒に昼食食べような。」

第六章 直子

「はい、みなさん、こんにちわ」と入り口の扉を開けて入ってきたのは、50代位の柔和な老人。

「（おお、おお、懐かしい懐かしい。吉岡先生だ。この先生卒業してからいたことすら忘れてた。今はどうしてるんだろうか。ひよっとしてぼっくり亡くなったりして……）」

相手がやさしそうな老人だから舐めているのだろうか、クラスから話し声があちこちからチラホラ聞こえてくる。

「はい、みなさん静かにしてくださいね。授業を始めますよ」とほんわかそうな声。

そう老人が述べると同時に、クラスでの話し声が止む。相手への同情心からだろうか。

「はい、前回クラスの誰かが読んでいる間丁度チャイムがなった、教科書の235ページを開いてください。」

「（235ページと。これは……文学か。現代文の授業なんだから当たり前といえば当たり前だが。手紙みたいだな。ああ、そういうことか、Kという文字が出てきて、更に遺書だということを考慮すれば、ずばり夏目漱石の「こころ」ということか。この作品大文学時代に入って何回か読んだけど、漱石にしてはシンプルで面白い作品なんだよな。言われてみれば高校の教科書にもってたっけ。）」

「えーと、それではですね、田中君、このページの頭の段落から読んで下さい。」

「はい」といって一人の男が立ち上がる。

「（音読か。バカみて。こんなくだらな習慣が学校時代にあつたな。一体音読して何になるっていうんだ。授業ではなくてまるで朗読会だな。文学を読むときは黙読が基本なんだ。黙読が……」

……）」

等々、一人心中で愚痴を言ったり、文学理論を展開していた大和君であつたが、その間にあてられた男はどんどん読み進め、

「はい、そこまで。」という具合に先生が呼び止め

「あ、はい」という風に田中なる男が応じる。

「えーと、それではですね。次は……」

「（おお、次は一体誰だ誰だ？）」「と何やら楽しそうに待ち構える大和君。

「えー、君島さん」

「はい」という風にロングヘアでポニーテールの女の子が立ち上がる。

「！！」

「えーと、？私は宅へ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。？からですよね。」

「はい、そうですよ」

「直子！！」と大和君が驚いたように立ち上がり、教室中の沈黙を破るかのような。声を上げる。クラス中がシンと静かになる。いやさっきまでも先生と朗読者以外の人は喋っていなかったが、教室全体は居心地のよい静けさには包まれていた。それが、いまや一転、緊張感の漲る静けさになったのである。

「どうしたのですか、大和君？君島さんがどうしましたか？」

さして驚いてはいないが、どこか授業を邪魔されたことにいら立ちを感じているみたいである。

見ると君島というロングヘアの女は顔が真っ赤になっている。

「え、いや、その、何でもありません。大変失礼いたしました。」

と大和君は何か恐怖と恥ずかしさを感じたように席に座る。

「やだ、何この恋愛ごっこ。」

「アツアツだよね。」

という風に教室から女子の聞こえさせるようなわざとらしい話し声が聞こえてきて、また話をしていない（こちらは女子だけではなく男子もだが）者でも、どこか微笑んでいる。ただ、先生、君島

という女、そして大和君の三人が黙っている。先生は茫然、君島は羞恥、大和君は驚愕の体である。

「えーと、君島さん。構わず続けてください。」

「・・・・・・」

「君島さん！！」

「あ、はい。えと、えーと、？私は宅へ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。？からですよ？」

「はい。そうです。」

「はい、それでは読み始めます。？私は宅へ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。？」

「（びつくりした。何故直子がここに？・・・・いやいや何を驚いているんだ、俺は。直子は高校時代の彼女。ただそれだけの関係だ。高校時代の彼女、それで今は高校時代。だから直子はここにいる。それだけの話だ。直子！と相手の下の名前を突然呼び上げて、とんでもない恥をかいたものだな）」

「？話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。？」

「（だが、直子は俺の初恋の相手。そしてそれが高校時代という青春真っ盛りの状態で行われる。やはりそれだけのことはあって、印象は今でも真新しい状態だ。初恋・・・・か。なぜかその単語を聞いただけで胸にのしかかる。やはり初恋というものは誰にとっても特別なものだからだろうか。ところが今はどうだ？恋愛を重ねた結果、相手の女と付き合うようになって、肌を触れ合っても、何とも思わなくなった。一体いつからだ？こういう状態になったのは？）」

「？私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思つかと聞くのです。？」

「（そういや今はどの状態だ。直子の告白前か、キスをした後か、セックスをした後か・・・・一体いつの状態だ。それによって今後直子と話をする時、こっちの取る態度を決めないといけないか

らな。まだ告白すら達していない段階ならば、変に勿体ぶったような態度をとると周りから訝られるし、かといって告白された後で下手に普通に接していたら、今度は直子自身に変な目で見られるからな。」

「？私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。？」

「（直子・・・そういえば直子とも高校卒業以来一回会ったきりだな。今何してるのかな・・・元気にしてるのかな。大学が離れ離れになってるので別れてしまったが、その後どうなったのかは、やはり音沙汰がない。普通に大学を卒業して、普通にOLとしてどこかの企業に勤めているのだろうか。それとも今はもう俺と同じ28歳。女性だったら結婚している人が何人もいる。だからどこかの男と一緒にって結婚したのかな。直子は決して駄目な女ではない。むしろいい女だといってもいい位だ。だからきつともう結婚したのだろう。）」

「？それでいて六畳の間の中では、天下を・・・天下を・・・」

「へいげいする、と読みます。」

「あ、はい。天下を睥睨するような事をいつていたのです。？」

「はい、ちよつと長かったけどそこまで結構です。」

「はい。」

「えーそれでは、次はさきほど突然席を立ちあがった大和君にお願いしてもらいましょうか。」

「え？あ、はい・・・はい、わかりました、先生！！」と不意をつかれたようで、大慌てで大和君が返事をする。

すると教室からクスクスという小笑い、所々聞こえ始める。よほど今日の大和君の周章狼狽ぶりが珍しいのだろう。

「あの、すみません先生、一体どこからでしたっけ？」

「ハハハハ」というさつきよりも大きな笑い声が生じる。

「？Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました、？という文章からですよ。」

「え、あのすみません先生、それは一体何ページからですか？」

「ハハハハハ」とさつきよりも更に大きい笑い声。

「240ページからですよ。」さすがに、苛立ちが募ってくる。

「ああ、そうでしたか。これは失礼しました。」

「はい、ではどうぞ読み始めてください。」

「？Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。……？」

大和君の読みっぷりは見事なものであった。遺書を書いていた先生の哀しみを見事に表現しており、……と彼の朗読ぶりを説明したいのも山々だが、これは本筋に関係ないので省略させていただく。ただ一つ述べておきたいのは、彼の見事な哀しみの籠った朗読により、それまで自業自得な（まあ決してそうではないのだが）辱めの挽回は十分にできたであろう、という事である。

「彼はモハメッドと剣という言葉に大なる興味をもっているようにでした。」先生もどうやら今日の大和君の奇態を忘れ、苛立ちも収まったみたいだ。

「はい、結構ですよ。大和君。どうもありがとうございました。」

おお、という感嘆の声がどこからか生じる。

「それでは次の段落に行きましょう。……。」と先生は次の生徒にあてる。

あてられた生徒が朗読していく中、大和君は相も変わらず考える。

「（初恋の相手もやがては過ぎ去りどこかへ消えていく。初恋は特別だというのに……。いや果たして本当にそうか？初恋の相手もその後の相手も決して大差あるものではないのじゃないかな？いや、それよりもだ……。なんか悲しいな。さつきあれほど元気だった雄大や初恋の相手の直子ともいつかは別れないといけないなんて……。結婚は……。結婚は別れなくてもいいじゃないか。でもお互い不必要な存在にはやはりなるのだろうな。だってそうだと……。もつとも胸がときめき、もつとも必要な存

在だと思っていた初恋の相手ですら、いつの間にやらいらなくなっ
てしまうんだから……」。

そうぼんやりと考えていたところ授業のチャイムになる。

「はい、今日はここまで。次回は漢字テストをしますね。」と、
最初と同じほんわかそうな声。

大和君は遠く離れた席にいる直子の横顔を見る。そして教室から
去っていく先生の後姿を見る。その顔つき、その瞳には一抹の寂し
さが漂っていた。

第七章 お昼休み（前書き）

昼食時間、偶然廊下で大和は直子とすれ違う

第七章 お昼休み

4限目の終了の合図となるチャイムがなった。ということは、昼食の時間である。休憩時間の長さ故、気が弛緩したのか、先生が去った後教室中でいたるところで大声の話し声が聞こえる。

大和君は、席を立つ皆とは対照的に直子の横顔を見続けた。彼女は今もまだ教科書を開いており、それを読んでいるというよりも、茫然とただ見続けているといった具合だである。彼女は決して美人というようなものではなく、男が誰でも付き合いたがるような女ではない。頬に無駄のない適度な肉があり、耳あたりには逆に緊張感を持ったかのように引き締まっている。長い髪がよく似合う。そういうような、見るものに対して不思議と静かな知性というものを感ぜさせる。知性の高い大和君のことだ。どこか歯ごたえのある恋人が欲しかったのだろう。

「（直子……）彼は直子の横顔を依然と見続けた。すると背中をびしつと叩く感触がした。

「何見てるんだよ。大和。」

どうやらさきほどの休み時間のスポーツマンである。

「痛いな、おい、何度も叩くなよ。」せっかくのロマンティックな物思いを台無しにされた恨むがように大和君は答える。

「だって、お前君島のことを一直線にばけーつと見てるから、ちよつとやさそつとじゃ現実に戻りそうにないからよ。」

「な……」

「おつと、誤魔化そうつていったって無駄だぜ。お前が君島のことを一直線にみてることなんて、教室のどこからみても、一目でわかるつて。」と、意地悪そうにスポーツマンは語る。

「え、そうなのか？」とちよつと驚きつつ、大和君は答える。見れば、クラスの何人かがこちらを向いている。

「そうそう。」

「そうか……」

「何だ。そのやる気のない返事は。」とスポーツマンはやや意気消沈する。どうやらもつと恥ずかしそうな対応を期待していたみたいだ。望んでいた対応を得られなかったことが口惜しいのか、追い打ちをかけるかのように次のようにスポーツマンは述べる。

「さつき、何だった、あの、直子！って突然叫び始めて。」と意地悪そうにスポーツマンは微笑む。

「なんでもねえよ。ただ君島の奴が授業中にあつたのが意外だなんて思っただけさ。」苦し紛れの返答である。

「おいおい、そりや答えになっていないって。そんなことだけで直子！って叫びやしないよ。」相手を追い詰めるかのような口調である。

「二人とも。」とオタク君が昼ごはんを持ってやってきた。

「ああ、そうか。昼食の時間だったな。ちよつくら弁当持つてくるわ。」

「（ほっ）」と内心、大和君はスポーツマンの追及から一時的にしろ逃げられたことを心中ひそかに安堵した。オタク君をみてみると、恋愛に関して好奇心盛んなスポーツマンとは違い、彼はさきほどの大和君の「直子！」という叫びには、まるで興味ないらしく、ただ黙々と昼食弁当を食べ始めた。

「そういえばさ……。」と大和君。少し困惑気味である。
「うん？」

「次の授業ってなんだっただけ。」なんか申し訳なさそうに大和君はオタク君に問う。

「体育だよ。」至って平然とオタク君は答える。

「ああ、そういえばそうだったっけな。」

「ところで大和。」と、弁当を持ってきて闖入してきたかのようなスポーツマン。

「はい？」と大和君は気圧され気味。

「お前君島とは一体どこまでいったんだ？」

「え、どこまでいったって。」それは大和君自身が知りたい回答である。

「手をつないだのか、キスまでいったのか、それとももう……とちよつと昂奮度が高まりつつスポーツマンは述べ続ける。

「もうベッドを共にしたのか？」とにやけ顔。オタク君の方はただ黙々と箸を動かす。

「（いや、実際どこまでいったんだろうな。ほかならぬ俺が知りたいよ。何とかしてこいつらから聞き出さないと……）」

「おいおい、まさかとぼけるんじゃないだろうな。」と肘で大和君の腕をつつく。

「この前お前が君島から告白されたことは皆知っているんだぜ。」

「（！！）」と、顔に真剣度が上昇。

「君島から放課後どこかの廊下呼び出されて君島の方から告白したというのはもう周知の事実だ。誰かが、偶然見かけたんだよね。」とにやけつつスポーツマンは微笑む。

「それはお前自身だってもう知ってるだろ。だから隠し事したってあんまり身にならないぜ。」と勝ち誇ったような顔。

「雄大、それはいつの話だ？」と真剣な質問。

「え、いつの話って……」予想外な返答にたじろぐスポーツマン。

「いつ俺が直子に告白されたんだ？」と依然として真剣。いや真剣さの度合いは更に上昇してみたのである。

「え、5日前だけ……ど……」圧倒されるスポーツマン。それをじつと見る大和君。そしてただ黙々と箸を動かすオタク君。

「（5日前……か……）」ということはまだ告白された段階であつて、その後の進展がないはずだ。まあ、もし今のこの過去が俺が過ごしてきた実際の過去と合致すれば、の話だが。じゃあ少し恥ずかしくしながら直子と接して……いや別にいいつか。もつと堂々と接しても……女は少し素っ気なく対応した方が比較的うまくいくのさ。）

「ところで大和君。」とオタク君がしかめっ面をしながらようやく重たい口を開く。

「何？どうしたの？」あわててオタク君の方を見る。

「次、体育の時間でしょ。だから着替えの時間とかもあるし、昼食の時間がいつもより短いから、早く弁当に手をつけた方がいいんじゃないの。」オタク君のかけている眼鏡が光る。

「ああ、そうだな。じゃあ」と机の上に置いてある弁当の箸を掴もうとするが、掴む直前になぜか気の迷いが生じ、手を引つ込める。

「どうしたんだ？」

「どうしたの？」

「ああ、悪い。ちよつと今日は食欲がないや……ごめんちよつとトイレ行ってくる。」と逃げるようにして大和君は教室内を去っていく。

「変な奴。」

「今日の大和君、一体どうしたのかね……」

廊下にて、比較的距離のあるお手洗いへと大和君は慌てて向かう。といって別に用を足していくのではない。ただあの会話、あの教室から逃げたかっただけである。どうも自分の居場所じゃないような感じがした、というのもおそらくは理由の一つであろう。

歩きながら下に向けていた顔を上にあげる……すると向こう側から直子が歩いてくる。

「直子。」と大和君の顔つきがやや強張る。

向こうも自分のことに気付いたみたいである。その証拠に直子は決まり悪そうに顔を下に向ける。

お互いの距離が近づいてくる。

どんどん近づいてくる。

どんどんどんどん近づいてくる。

お互いはすれ違う。ただ大和は顔を強張らせたまま正面を向くばかりであり、直子は顔を下に向けるばかりである。何も起こらぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1217z/>

大和と青春

2011年12月7日10時56分発行